

## 「君看よ双眼の色」

茨城県 安禅寺 染谷典秀老師

江戸時代後期、越後国に生を受けた曹洞宗の僧侶良寛を思う時にまず浮かんでくるのは、笑顔ではないでしょうか。子どもたちと手毬やかくれんぼをして遊んでいる様子を、良寛自身の歌や、伝えられた逸話などからうかがうことができます。かくれんぼをした時などは、かくれるのがあまりに上手で子どもたちが見つけられず、そのうち日が暮れてみんな家に帰った後も、ずっとかくれ続けていたといいます。

そんな良寛が揮毫<sup>きごう</sup>を依頼された際に、好んで書いていたのが「君看よ双眼の色、語らざれば憂い無きに似たり」という古詩でした。「あなた目をみてごらんささい、語ることがないから憂いがないようにみえるでしょう」という意になるでしょうか。「憂い無きに似たり」には、悲しみ苦しみが深いところに潜んでいる、ということが含意されている言葉です。

手毬をつきかくれんぼをする良寛が、このような古詩を揮毫していたのです。良寛の笑顔の向こうには何があったのでしょうか。

群馬県の、ある寺の墓所に一群の石塔があるそうです。その墓石を見ると、そこには二十歳に満たない男の子や女の子の名前が記されていて、名前の脇には出身地が添えられていました。良寛が庵を結んだ山の麓の村の名前でした。

おそらく、幼くしてその子たちは<sup>みくに</sup>三国山地を越え<sup>じょうしゅう</sup>上州に渡り、奉公先で身を粉にして働いたのでしょう。そして体をこわし、若くして亡くなったのだと思われます。

その子たちこそ、良寛と一緒に手毬をしたりかくれんぼをして共に過ごした子どもたちだったのです。

良寛はすべてわかっていたのでしょう。目の前で笑いさざめく子どもたちの多くが、奉公に出て、若くしてこの世を去ってしまうことを知っていた。けれど、自分には何もできない。せめて笑顔を、楽しく過ごす時間を共有することしかできないのだ。

良寛の笑顔の向こうには、そのような思いがあったのだとおもわれてなりません。